

Ⅲ 転校生への援助と特別支援教育

6章 避難児童生徒（転校生）を迎える10のポイント — チーム援助で

<学校は、子どもが友だちと出会える場所。援助する大人がいる場所>

☆受け入れる子どもにとっても、チャレンジであり、成長するチャンスです。それは子どもたちが、転校生とともに、危機的な状況からの回復過程を共有するからです。

1. 「災害後」のストレス

主な症状には、いらいら、まわりつき、集中力の欠如、悪夢、登校しぶり、睡眠や食欲の問題などがあります。これらは、「異常時」における「正常な反応」です。ただし、次の場合は特別の援助が必要です。スクールカウンセラー、教育相談センター、医師等に相談し、「援助チーム」で取り組みましょう。

- ①状況がひどくなる場合 睡眠の問題が長く続く。まわりつきが少なくならないなど。
- ②個人的要因 災害以前から、発達障害、いじめられた経験、不安傾向が強いなど。
- ③家族の要因 家族が離れ離れになっている、家族を失ったなど。
- ④環境の要因 知らないところに避難してきたなど。

2. めざすこと

転校生の援助でめざすことは、以下の4つです。

- ①児童生徒が安心して生活する 周囲の物理的・心理的環境(家庭、学校、学級)が重要です。
- ②日常生活を回復する 生活のリズムを取り戻すことが鍵になります。
- ③主体性を回復する 学校や家での活動が少しずつ主体的になっていくことが望まれます。
- ④できごとをゆっくり受け止めて、きちんと悲しむ つらい気持ちを表現することが、子どもの回復過程で重要です。安心できる環境、聴いてくれる人がいるところでは、子どもが気持ちを表現しやすいと思います。子どもの表現方法は、さまざまです。泣く子どもも、たんとんと話す子どももいます。それぞれの表現の仕方を尊重しましょう。

3. 避難児童生徒（転校生）の援助体制 — 「チーム」で援助

学校全体で、転校生を迎え援助することが求められます。そのためには、二つのレベルのチームが必要です。学校全体の「危機対応チーム」と、特定の子どものための「援助チーム」の2種類が考えられます。

(1) 危機対応チーム

子どもが地震のことで不安になっている状況、そして学校で避難児童生徒を迎えるという状況は、学校において「危機支援」を行うときと言えます。危機対応チームは、学校全体ですべての子どもを支え、転校生を支えるシステムです。主なメンバーと役割をあげます。

管理職：代表、マスコミ対応。

教務主任、生徒指導主事：援助のコーディネーション、授業や行事の工夫。

養護教諭、特別支援教育コーディネーター、スクールカウンセラー：個別の対応、授業や子どもの対応などへの助言。

教育相談センター担当等：外部からの援助。

これまでの在籍校、教育委員会等との情報交換が必要になります。在籍校・教育委員会が災害の影響で機能していない可能性があります。その場合は、保護者から得られる情報で対応することになります。

(2) 避難児童生徒のための「個別の援助チーム」

子どもの変わっていくニーズをタイムリーに把握し、援助を工夫することをめざした、個別の子どものためのチームです。学級担任、学年主任、養護教諭、スクールカウンセラー、保護者などから構成されます。転校生には、震災によるストレス、家や地域と離れたストレス、新しい学校生活というストレスがありますので、個別の援助チームで対応する必要があります。『援助チームシート』(石隈・田村, 2003)などを活用し、情報の収集とまとめ、援助方針の共有と援助のコーディネーションを行います。特に地震発生以前から子どもが学校生活で苦戦していた場合、発達障害の傾向がある場合など、転校後の困難が大きくなることが考えられます。国立特別支援教育総合研究所の作成した『震災後の子どもたちを支える教師のためのハンドブック～発達障害のある子どもへの対応を中心に～』が大変参考になります。

4. 転校生援助のポイント

転校生を迎え、援助する主なポイントをあげます。転校生自身から、どんな援助が必要か、今行っている援助は役立っているかななどを、確認しながら、進めることが大切です。

(1) 転校生・保護者と面談

被災の状況、子どもの苦痛の要因(例:家族・友人の喪失)、心身の健康などについて、無理のない聞き方で、教えてもらいます。とくに、「子どもの好きなこと・得意なこと」「生活面で困っていること」「学習の困難、対人関係の問題などで援助が必要なこと」について、情報を収集します。

(2) 子どもの心身の健康観察・健康相談

養護教諭が中心となり、子どものストレスの状態を含めた心身の健康を観察し、把握することが大切です。「震災ストレス ケア・マニュアル(小学生版)(日本生理人類学会ストレス研究部会編)」には、活用しやすいストレスチェックがのっています。

(3) 学級での転校生の紹介、転校生もふくめた学級づくり

いつもの年度より時間をかけて、学級づくりを行うことが望ましいです。構成的グループエンカウンター、対人関係ゲームなどから、担任が行いやすい方法で行うことができます。また転校生との関わりには、先生の関わり方が他の子どものモデルとなります。転校生という「異文化」をもつ人から学ぶという姿勢が大切です。

(4) 児童生徒による歓迎チーム

転校生が新しい学校になれ、学校生活を進められるために、「歓迎チーム」は力を発揮します。学校で歓迎チームのメンバーを募集します。小学校では、5年生・6年生から、また中学・高校ではどの学年でもOKです。歓迎チームの活動は、学校案内、地域の案内、宿題の手伝いなどです。また歓迎チームのメンバーは、転校生の最初の友だちになる可能性があります。最初の1ヶ月、あるいは1学期に限定して行うこともできます。また歓迎チームの担当教師を決めておく必要があります。転校生の学級担任、学年主任、教頭などが考えられます。

留意点としては、歓迎チームの子どもは、教師と相談しながら活動を行うことです。とくに転校生の様子で心配なことがあったときは、すぐに教師に援助を求めるように伝えておくことが大切です。

そして「転校生同士」のつながりも大切です。避難児童生徒の転入先の決定においては、出身地の子どもたちが一緒に学校に転校することが望ましいと言えます。現実的には、子どもの避難先の住居等で、違う学校に通うこともあるかと思えます。同じ地域にきた転校生同士、同じ学校に通う転校生同士がつながり、相互に支え合う関係ができるよう、援助するとよいと思えます。

(5) 今回の能登半島地震についての授業

子どもたちに、今回の大震災について、授業、学級会、ホームルーム等でとりあげることが重要です。被災の程度、あるいは被災地や被災者との距離で、子どもたちの地震に関する受け止め方は多様であると言えます。すべての子どもにとって、地震について理解し、不安を少なくし、また転校生への偏見を減らすことが求められます。

子どもに話すときは、まず学校全体で、「地震についての事実」について確認しておくことが望まれます。教師自身が、地震について、不確かな情報をもったままでは、避けたいと思います。子どもに話すポイントは、「子どもたちが知っていることを聞く。まちがっていたら訂正する」「子どもからの質問を歓迎し、質疑応答の時間をもつ」「地震に関して、自分でできる援助」についてです。その際地震などの危機状況では、「不安になったり、悪夢をみたり、食欲が減ったり、眠れなかったり、集中力がおちたりする」ことは、「異常時における正常な反応」であることを、子どもに伝えることが重要です。

また転校生には前もって授業の内容を伝え、話す内容や使うことばで、転校生のつらい体験をさらにつらいものにしないように工夫するとともに、転校生の授業への参加の仕方について決めておく必要があります。保護者にも、前もって授業について伝えておくと、子どもの授業の安心感が増すことがあります。

(6) 授業時間での工夫

転校生も、あるいは他の子どもも、学期始めは、心身ともに疲れていて集中力が低下していることが考えられます。授業中 15 分程度で気分転換を図ったり、休憩を入れたりすると、学習活動にプラスになります。毎日、深呼吸や体を動かすなど「リラクゼーション」を行うと、効果的です。

転校生の学習態度(ぼーとしているなど)については、寛容にみる必要があります。

また成績の評価についても、「病気で入院していた子どもが退院してきたとき、体育の授業への参加や成績をどうするか」という視点を参照して、柔軟に行うことが望まれます。

(7) 授業内容・行事での配慮

今回の能登半島で起こった元日の地震以降、多くの子どもたちは、不安で、不安定な日々を送ってきていると思います。まして避難してきた転校生には、避難所での生活もあり、新たな学習環境への適応にも疲弊することが予想され、失った学習時間への対応が必要です。また教科書の違いへの対応も必要です。

そして重要なことは、授業や行事(例:運動会、文化祭、避難訓練)での、転校生への配慮です。転校生にとっては、災害で起こったことに直面するまでには、時間が必要です。つらい体験を刺激することは、慎重でありたいと思います。例えば「死」を扱う教材、運動会での怖い場面(仮装行列で怖い姿など)には配慮が必要です。

(8) 転校生が感情を表現する機会

転校生が、自分に起こったできごと(例:「飼っていたペットが津波で流された」「親戚の人がなくなった」)について友人、担任、養護教諭、スクールカウンセラーなどに、話すことは大切です。「大変だったんだね」「怖かったんだね」などと、受容的に聴くことです。

しかし無理には聞き出すことは、さげなくてははいけません。つらい体験の表現には、個人差があることにも留意したいと思います。

(9) 転校生が楽しめる活動や自分を発揮できる活動

転校生にとって、楽しい活動を行うことは、心身の健康や日常的な生活の回復を促進します。転校生が好きなことについての情報が、役立ちます。部活動も、本人が望むのであれば、日常生活や主体性の回復に、効果的です。また子どもが得意な科目や領域で、力を発揮する場面を作ること、周りから認められる機会となります。

(10) 子どもの対応や回復過程を援助

転校生の回復過程において、前向きな姿勢や問題解決の工夫など、子どものよいところをほめることが、子どもに力を与えます。もちろん、「できたりできなかつたり」の状態が続くことを理解しておきましょう。

5. 保護者の援助

転校生の保護者を援助することも、学校ができる役割です。

(1) 保護者の面談の進め方

避難してきた子どもの保護者との面談においては、保護者の大変さを理解し、ねぎらうことが基本となります。そして保護者と学校で、子どもの学校生活を共に支えることを伝えていきます。学校での様子を伝えるときは、保護者の気持ちに十分配慮する必要があります。例えば「学校では元気にやっていますよ。」というと同時に、「お母さんがそばにいらっしゃるので、安心できているのでしょね」と加えることもできます。

保護者によっては、地震の体験について話すかもしれません。それは教師が信頼されている証であり、保護者がそれを話す気持ちになっていることを意味します。保護者のつらい体験を聴くことは、保護者の心理的な回復に役立ちます。カウンセラーとして、あるいは教師として、というスタンスで構えることは、ありません。一人の隣人として、聴くだけです。保護者のなかには、被災に関する怒りを表現する場合もあるかもしれません。その怒りは「教師に対する感情」ではなく、「教師に表現している感情」です。きちんと聴くことが、基本となります。

(2) 保護者の困りごとの理解と援助

保護者は、子どもについて、また新しい地域での生活について、困っていることが多いと思います。学級担任以外に、学校での相談窓口があることが望ましいです。例えば、学年主任、養護教諭、教育相談担当などです。最初の面談のとき、地域の地図(買い物、病院、交通手段、映画館など)を準備して渡すとよいでしょう。また小さい子どもがいる、経済的に困っている、不安傾向が強い、震災について怒りが激しいなど、援助ニーズの大きい保護者の場合は、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の活用も有用です。

(3) 保護者同士の関係づくり

保護者が同じ学校の保護者とつながることも、保護者の援助につながります。PTAを活用して、近所の保護者から声をかけてもらうのがよいでしょう。また子育てに関する地域の会があれば、紹介することもできます。そして避難家族同士のつながりも大切です。学校で、転校生の親が出会える機会を作るのも援助になります。

6. 援助者自身のケア

転校してきた子どもや保護者を援助する先生方は、自分のことを二の次にしがちです。子どもへの援助の成果は目に見えにくく、援助者は燃え尽きる可能性が大きくなりかねません。「睡眠不足・食欲低下、孤立感、被災者のことばかり考える、一人でがんばる」など状況は、「黄信号!」です。その時は次のことをおすすめします。

- ①自分の限界を知る。助けを求める。
- ②普段通りの日課を続ける。
- ③定期的に休憩を取る。
- ④自分の実践を振り返る。自分をほめる。

<自分自身にやさしく、他者にもやさしく>

参考:“Responding to Hurricane Katrina: Helping Students Relocate and Supporting Their Mental Health Needs”, National Association of School Psychologists.

石隈利紀・田村節子(2003) 石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門ー学校心理学・実践編 図書文化

子ども・学校の危機支援に関する情報は、以下のHPを参照してください。

アメリカ学校心理士会 (NASP : National Association of School Psychologists)

<https://www.nasponline.org/resources-and-publications/resources-and-podcasts/school-safety-and-crisis>

日本学校心理士会

<https://www.gakkoushinrishi.jp/association/team/>